「地域」「大学」「広報」

NO.27

今、「大学」という〝地域資源〟を生かしたまちづくりが注目されています。一方、大学では、「地域貢献」を掲げ、地域に根ざした大学のあり方を模索する動きも高まっています。「地域」と「大学」による「官学連携」について、現場ルポ・シリーズで紹介しています。

文楽界の名手と大学とのコラボレーション 地域の伝統芸能を学問的体系のもとに学ぶ

■大阪市立大学「上方文化講座」

大阪市立大学（大阪市住吉区）で年一回開催されている「上方文化講座」は今年で6年目を迎えた。大阪を代表する伝統芸能「文楽」がテーマである。文楽とは、太夫が語り、三味線弾きが演奏し、人形遣いが人形を操る三業が一体となった人形浄瑠璃の形である。2003年にユネスコの世界無形文化遺産に指定された。上方文化講座は04年9月に始まり、『曾根崎心中』を題材に開催。今年は『仮名手本忠臣蔵六段目』で8月26日から三日間、開催された。文学部の正規の授業科目を、大阪市民のみならず、広く全国に開放しているのが特色である。

（広報コンサルタント・萩原誠）

「大学は都市とともにあり 都市は大学とともにあり」

大阪市立大学のルーツは1880（明治13）年に開所された大阪商業講習所であり、現在の大学の前身大阪商科大学が、わが国初の市立大学として創設されたのは1928（昭和3）年である。大学創設に際して、当時の関一（せきはじめ）大阪市長は、「大学は都市とともにあり、都市は大学とともにある」と宣言した。その関市長の思いは、80年後の今、「都市型総合大学」をめざす大阪市立大学の教育・研究の大綱として連綿と引き継がれている。現在の大阪市立大学は8学部・大学院10研究科、学生数7127人、大学院生2038人、教員732人、職員1330人と、公立大学では日本最大の規模を誇る。

金児暁嗣（かねこさとし）学長に、大学の経営方針を聞いた。

金児暁嗣・大阪市立大学 学長

――地域貢献こそ公立大学の使命とおっしゃっていますが。

「このところ国立大学も、私立大学も、こぞって地域貢献を打ち出し、自治体との包括協定を結ぶ動きが盛んです。地域の活性化や再生のために、それぞれの地域の大学が切磋琢磨して協力することは地域にとっても望ましいことです。本学の場合は大阪市立の大学にふさわしい都市型総合大学をめざしています」

――「都市型総合大学」とは？

「一言で言いますと、国立大学のコピーでない大学ということです。大阪という大都市に必要な精神文化の中心機関として、大阪を背景とし

「仮名手本忠臣蔵」を題材に文楽を学ぶ大阪市立大学「上方文化講座 2009」は、8 月 26 日から 3 日間、同大学術情報総合センターで開かれた。竹本津駒大夫（太夫、上写真中）、鶴澤清介（三味線、同右）、桐竹勘十郎（人形遣い、同左）の各氏と、日本近世文学や中国演劇などが専門の同大学文学研究科の教員が講師となり、物語の解説や文楽の実演などが行われた。右写真は、受講中の様子

「上方文化講座」2009『仮名手本忠臣蔵六段目』カリキュラム

■授業期間
2009 年 8 月 26 日～ 8 月 28 日（9 時 30 分～ 16 時）
■講師
～文楽技芸員～
竹本津駒大夫（太夫）
鶴澤清介（三味線）
桐竹勘十郎（人形遣い）
～文学研究科教員～
久堀裕朗 （日本近世文学）
塚田孝 （日本近世史）
松浦恆雄 （中国演劇）
小田中章浩（フランス演劇）
丹羽哲也 （日本語文法）
小林直樹 （日本中世文学）
■授業内容
（8 月 26 日）
赤穂義士劇の系譜（久堀）
『仮名手本忠臣蔵』解説（久堀）
切腹の文学史（小林）
近世大坂の芝居と身分社会（塚田）
（8 月 27 日）
『仮名手本忠臣蔵』〔六段目〕講読（久堀）
浄瑠璃の言語（丹羽）
『仮名手本忠臣蔵』――太夫・三味線の芸（津駒大夫・清介）
『仮名手本忠臣蔵』――太夫・三味線・人形の芸（津駒大夫・清介・勘十郎）
（8 月 28 日）
フランス人が真似た日本の文楽（小田中）
伍子胥から見た中国の復讐物語（松浦）
桐竹勘十郎師に聞く――実演をまじえて（勘十郎）
文楽の至芸――太夫・三味線・人形、三業一体の舞台（津駒大夫・清介・勘十郎）

た学問の創造、大阪の市民と生活に密着した大学運営をめざすものです」

――具体的な活動は？

「大都市大阪は今、大きな変わり目にあります。本学はその大阪の再生と創造に寄与する大学でなければなりません。そのため、２００７年に『大阪市との新時代パートナーシップ協議会』を設置しました。これは双方の経営課題について情報共有化を図るとともに、共同プロジェクトでの連携を検討推進するためのものです。本学は大都市の抱える諸問題へ対応するために、すでに『都市研究プラザ』や『複合先端研究機構』を設置しています。後者は理系の研究科を横断した研究組織で、たとえば都市圏の環境再生に向けて、エネルギー・水・生態系の循環・活用などを研究しています」

――「上方文化講座」の開講もその一環ですか？

「そうです。地域住民の方々に高等教育の機会を提供することによって、本学が市民に親しまれ、市民の誇りである大学になるためのプロジェクトの一つです。０７年から『桂春団治一門による「大阪落語への招待」』という講座もスタートしました。桂春団治さんが、たまたま本学の近くに住んでおられることもあってこの講座は実現しました」

都市の伝統文化研究をネットワーク化

大阪市立大学の上方文化講座は、大阪の地に歴史的に育（はぐく）まれた文化である伝統芸能「文楽」を、文学部の特別授業科目として、学問的体系のもとに学ぼうとするものである。これまで『曽根崎心中』（０４年）、『国性爺合戦』（０５年）、『冥途の飛脚』（０６年）、『菅原伝授手習鑑』（０７年）、『義経千本桜』（０８年）が取り上げられ、今年度は『仮名手本忠臣蔵』ということになった。

上方文化講座は、当代浄瑠璃研究

【関連サイト】
●大阪市立大学
http://www.osaka-cu.ac.jp/
●大阪市立大学文学部特別授業「上方文化講座」
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/lit/lect/kamigata/

の第一人者である阪口弘之大阪市立大学名誉教授によって基盤がつくられ、現在は新進気鋭の近世文学・浄瑠璃研究者である久堀裕朗准教授に浄瑠璃研究の灯が引き継がれている。

この公開講座にはいくつか特色がある。

一つは、「人類共通の無形遺産」の伝承を担う当代超一流の文楽技芸員である竹本津駒大夫（太夫）、鶴澤清介（三味線）、桐竹勘十郎（人形遣い）の三師を学外非常勤講師として迎え、一貫して同じメンバーで、実演とともに伝統芸能の奥義とその心を語ってもらうこと。

二つ目は、文学部のさまざまな専門分野の教員がそれぞれの立場からその年度の出し物をめぐって多面的に講義すること。今年度の講義では、「切腹の文学史」（小林直樹教授・国文学）や「浄瑠璃の言語」（丹羽哲也教授・国語学）、「近世大坂の芝居と身分社会」（塚田孝教授・日本史学）、「伍子胥から見た中国の復讐物語」（松浦恆雄教授・中国文学）、「フランス人が真似た日本の文楽」（小田中章浩教授・表現文化学）がそれにあたる。

三つ目は、大阪生まれの文楽が「人類共通の宝」としてユネスコの「人類の口承および無形遺産の傑作」に選ばれた普遍的意義を、世界的な歴史的芸術文化の中でどう位置づけるかという研究の一環として行われていることである。

大阪市立大学大学院文学研究科・文学部の上方文化研究のめざす方向について、文学研究科長の村田正博教授は、「私たちは大阪という都市をめぐる文化の総体を上方文化と理解しています。文学部・文学研究科には『都市文化研究センター』という組織があり、大阪という地を中心に、上海・北京・ハンブルク・ロンドン・バンコク・ジョクジャカルタにサブセンターを設置して、比較都市研究、文化資源論などをテーマに、都市に関する歴史的アプローチと現代文化論的アプローチの融合を目指した研究を進めています」という。

大阪という都市に育まれた文化の代表「文楽」を通して、世界や人類の真実につながる普遍の問題を考えるきっかけを学生や市民に提供したいというのが、この講座のねらいである。

「文楽は、やっぱり大阪のもん！」

上方文化講座、最終日恒例の「文楽の至芸」出演前のあわただしい中、竹本津駒大夫、鶴澤清介、桐竹勘十郎の三師に聞いた。

――この講座が6回も続いてきた理由は何でしょうか？

「はじめは2、3回で終わると思って引き受けましたが、先生方の熱意に引きずられて今日まで来てしもうたというのがほんまのとこです。もう来年の話も出てますし、4年後は10周年ということで、そこまでお付き合いせんといかんのかなぁとは思うてます」

――現在の講座のやり方に要望はございますか？

「いまの会場では狭いので、市民の希望者で抽選に外れた方から（私どもにまで）ずいぶんクレームがきます。もっと広い会場でやれたらなぁと思うてます」

――この講座に期待することは？

「（文楽という）文化は、（浄瑠璃を）聴く方も勉強してもらわな成り立ちません。耳を文楽に慣れていただくことです。文楽は江戸時代版の娯楽なんです。難しく考えんと、先のながーい、学びごとと思ってもろたらいいんです。学生さんも、市民の皆さんも、この講座を通じて、もっともっと文楽に興味を持ってもろうて、劇場に来てもらいたいです。劇場の雰囲気はそりゃ違います」

――この公開講座を東京で開催してはどうでしょうか？

「文楽はやっぱり大阪のもんですねん。東京で大学主催の文楽公開講座をやったら、専門家の学術シンポジウムになってしまう気がしますね。江戸時代から文楽は大阪が本場と決まってます」

大阪市住吉区にある大阪市立大学・杉本キャンパス

「期待以上の勉強ができた」受講生からの声

今年度の社会人の受講生にアンケートした。93人全員に回答してもらった。「文楽に興味があったこと」と「自己啓発のため」が、応募の動機の大半を占める。年々受講希望者が増えて受講は抽選で決まる。今年の倍率は3倍強だという。大阪市民以外にも門戸を開いているので、今回の受講生は大阪市民33人、大阪府など近畿圏38人、関東ほか22人という構成で、うち11人が東京都からの参加。男性と女性の比率は1対2である。

多くの受講生が、講義内容が期待以上で、文楽への興味が一段と高まったと答えている。一部を紹介すると――

「盛りだくさんの内容にびっくり。文楽鑑賞のために、少しでも多くの知識を得たいと思って応募しましたが、それ以上の勉強ができ満足しています」（大阪市／女性）

「勉強することがこんなにおもしろく楽しいという、大切なことを教えていただきました」（東京都／女性）

「授業の質が高く文楽を多角的に知ることができて良かった。特に技芸員の話を聞く機会が少ないので大変おもしろく、圧倒された」（大阪市／

男性）

「他の大学の講座もいくつか受講しているがこの上方講座はダントツにすばらしい！会場も熱気にあふれている」（京都府／女性）

「大阪人にとっての文楽が身近に感じられてよかった。技芸員の方々の説明もツボにはまっており、間近で演技が見れるので、また公演を見たくなった」（大阪市／男性）

「上方文化に興味と関心を持ち、教養を深めようとしている方がたくさんいらっしゃることが分かった。それを知っただけでも有意義でした」（広島県／女性）

市民受講生の真剣さが学生たちの刺激にも

開設当初からこの講座の企画委員長を務める小林直樹教授に聞いた。

――この講座が6年も続いている理由は何でしょうか？

「三人の技芸員の皆様の熱意のおかげです。ご多忙なスケジュールにもかかわらず、この講座の日程を最優先に決めていただいています」

――これまで市民の受講生はどう変化してきましたか？

「最初のころは熟年世代の受講生の方が大半でしたが、ここ数年、30代から40代の女性が増えてきたのが特徴です。また、近畿圏以外からの応募も増加しています」

――この講座のPRは？

「2007年3月の外部評価報告書で、地域貢献のあり方として、この講座が高く評価されてから学内の目も好意的に変わってきました。わずかですがPR予算もつくようになり、講座のPRチラシを作製して、文楽劇場や東京の国立劇場に置いていただき、ホームページも開設することができました。そのため07年から受講希望者が急増しました」

――学生の受講生も増えているのでしょうか？

「第一回目は20数人だったのが、次第に増え、今年度は50人以上になっています。市民受講生の真剣さが学生たちの刺激になっていることは確かです」

――この講座を再現した書籍が出版されています。

「講座の内容を広く学外に向けて発信するためです。2006年に『曾根崎心中』を出版し、このほど二冊目の『菅原伝授手習鑑』を上梓しました。研究者にも一般の文楽ファンにも読んでいただける内容になっています。これらの本を通して、全国の方々に講座の存在を知っていただき、文楽の聖地、大阪の国立文楽劇場に足を運んでいただくきっかけにもなればと願っています」

――この講座のこれからは？

「来年は『一谷嫩軍記』を取り上げます。やがて迎える10周年には、記念の企画を検討中です。出版事業も継続する予定ですので、ご期待ください」

「上方文化講座」の成果をまとめた「曾根崎心中」（2006年刊）と「菅原伝授手習鑑」（2009年刊）。大阪市立大学文学研究科「上方文化講座」企画委員会編、和泉書院・定価2,100円。下は、大阪市立大学文学部特別授業「上方文化講座」のホームページ
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/lit/lect/kamigata/

小林直樹・文学研究科教授（上方文化講座企画委員長）

広く社会に開かれた大学を

地域の文化は一朝一夕に生まれるものではない。経済と文化は表裏一体のものである。大阪は江戸時代に〝天下の台所〟といわれ、日本の経済の中心地であった。北前船や樽廻船が、大坂と松前や江戸との物資の輸送に活躍し、米、昆布、菜種、清酒などの取引によって大坂を日本一の商業都市に押し上げていた。その経済の隆盛が、人形浄瑠璃文楽に代表される上方文化を誕生させ、発展させたのである。

21世紀の今、文化や芸術から大阪の再生を図ろうとする動きが活発になっている。大阪市立大学の上方文化講座もその一つである。今年受講しているある大阪市民は、「大阪市民として、市立大学が市民にも広く開かれたものとして実践されていることに感銘をうけました。このたびのような大学の授業に学生とともに一般人が参加するという形は、私には、レベルの差を感じつつもよい刺激でした」とアンケートに答えている。

大阪市民はもとより、学問に関心を持つ人々を受け入れる、大阪市立大学の日本の伝統芸能を学ぶ公開授業の試みは、大学の地域貢献のモデルとして高く評価される。

はぎわら・まこと／1945年鹿児島県生まれ。67年帝人株式会社入社。マーケティング部長、広報部長、調査役などを歴任。2003年退社。広報部長時代に培った企業広報ノウハウを活用して、企業のほか、自治体、大学などに関する広報アドバイザーとして活躍する。日本広報学会会員、日本経営倫理学会会員、静岡県東京事務所広報アドバイザー、日本原子力学会会員。著書に『広報力が会社を救う』（毎日新聞社）。